感動通信

National Committee of Dairy Farms for Schools

酪農教育ファーム

Vol.61
January 2021

《酪農教育ファーム実践研究集会　特集号》

～酪農教育ファーム活動の価値再発見～

感動通信 Vol.61 January 2021

企画発行 ● 一般社団法人 中央酪農会議
酪農教育ファーム推進委員会

〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町2-6-1 堀内ビルディング4F
【TEL】03-6688-9841 【FAX】03-6681-5295 【URL】https://www.dairy.co.jp/edf/

インフォメーション

令和2年度
「アニマルウェルフェアの考え方に対応した乳用牛の飼養管理指針」の周知に関する研修会を開催しました。

（一社）中央酪農会議は、令和2年11月30日、「アニマルウェルフェアの考え方に対応した乳用牛の飼養管理指針」の周知に関する研修会を、オンライン（Zoomを使用）にて開催し、酪農家や酪農教育ファームファシリテーター、指定団体等の担当者など約80人が参加しました。

はじめに、（一社）中央酪農会議の迫田潔専務理事が、生乳需給の状況など酪農を巡る情勢に触れた後、アニマルウェルフェアの指針について改めて学び、ご自身の乳牛の飼養管理に役立ててほしいとあいさつしました。

続いて、白尾紘司氏（農林水産省生産局畜産部畜産振興課畜産技術室・課長補佐）により「アニマルウェルフェアに配慮した家畜の飼養管理等」の講演が行われ、最後にチャットを活用した質疑応答がなされました。

アンケート自由記述より（一部抜粋）

・全体を通して、牛のことを考え直す機会になり、とても勉強になった。（酪農家）
・「アニマルウェルフェアへの配慮」というのは、家畜を自由な状態で飼っていれば実行できているという単純なものではなく、あらゆる側面から、牛の状態を観察して、考えて実行していくことだと分かった。チェックリストを見ても、日常的にやっていることばかりだったので、自信をもって牛と接することができそう。（酪農家）
・初めてのWeb形式の研修だったが、接続手順書の事前送信等、事前対応や当日対応がとても良く安心して研修を受講することができた。（酪農家）
・地方にいても、子どもがいても参加できて非常にありがたい。ネットさえあれば全ての人が平等に学ぶ機会を与えてもらえる時代になったのだなとうれしくなった。（団体職員）

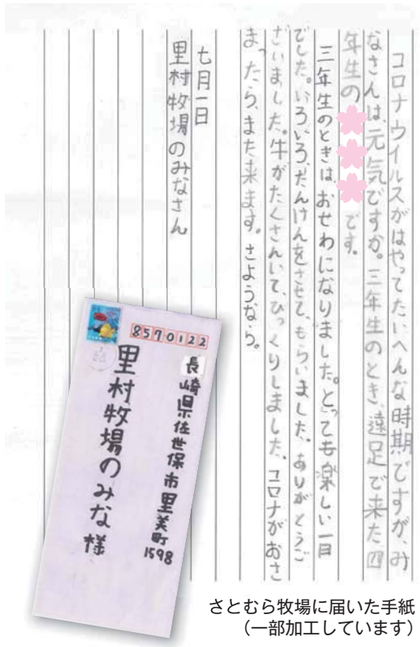
コラム **face to face**

facilitator × cow × education

児童からの手紙で、また牛と共にがんばろうと思えました

2020年7月、一通の手紙がさとむら牧場（長崎県佐世保市）に届きました。昨年度、遠足でさとむら牧場を訪問した小学校の児童からの手紙です。遠足の思い出と感謝、そしてコロナ禍がおさまったらまた牧場を訪問したいという気持ちがつづられていました。今年度はコロナ禍で学校行事が軒並み中止や縮小になりました。遠足を楽しみにしていた児童が、去年の体験を思い出し、手紙を書いたのかもしれません。手紙を受け取ったさとむら牧場の里村睦弓さんは、その時の気持ちを次のように語ってくれました。

「この状況の中で、普通のことが普通にできません。短縮された、子どもが大好きな夏休みの中の１日を、牧場を思い出し手紙を書く時間に使ってくれたことが、とてもとてもうれしかったです。また、今夏は、長雨、猛暑で、牛にとっても酪農家にとっても大変な時期でしたが、そんな私たちの心に優しい風を吹かせてくれ、牛と共にがんばろう！　と思わせてくれたお手紙でした」



さとむら牧場に届いた手紙
（一部加工しています）

Contents

Vol.61　January 2021

02 コラム face to face
児童からの手紙で、また牛と共にがんばろうと思えました

03 令和２年度　酪農教育ファーム「実践研究集会」
オンラインで分かち合おう！ 酪農教育ファーム活動の価値再発見!!

04 <実践事例発表>
①牛(酪農)とのふれあいを通して絆を育む教育実践　帯広市立森の里小学校　教頭 髙橋 淳一 氏
②小泉牧場物語　筑波大学附属小学校　教諭 由井薗 健 氏

07 <ワークショップ>
酪農教育ファーム with コロナ
～活動の価値と役割を再確認し、今自分たちに何ができるか考えよう～

10 <実践事例>
学校行事が減っている今こそ、体験の価値を子どもたちに
～実践研究集会に参加した酪農家の方々にお話を伺いました～
切替牧場株式会社　切替 宣充 氏／田嶋牧場　田嶋 和恵 氏

※読者アンケートにご協力をお願いします。
URL=https://forms.gle/tTbDq6akezwo7T9j9

令和2年度 酪農教育ファーム「実践研究集会」

オンラインで分かち合おう！
酪農教育ファーム活動の価値再発見!!

酪農家・酪農関係者と教育関係者が集い、酪農教育ファーム活動の価値と役割を再確認し、未来につなげる「実践研究集会」が、令和２年10月11日、日本酪農教育ファーム研究会と（一社）中央酪農会議の共催で開催されました。８回目の今回は、初めてのオンライン開催となり、オンラインならではの環境を活かした実践発表、ワークショップが行われ、全国から約60名の参加がありました。

冒頭、日本酪農教育ファーム研究会の福井みどり会長（墨田区立寺島第三小学校）は、「酪農教育ファーム活動は教師を変える、子どもたちを輝かせる、自分のいのちも他のいのちも輝くことを教えることができる教育。子どもたちの未来を明るく照らすものと期待したい」とあいさつしました。続いて、（一社）中央酪農会議の迫田潔専務理事は、コロナ禍での生乳需給の状況を説明したあと、「本会議で交流活動におけるガイドラインを策定した。各牧場や学校で工夫しながら徐々に活動を再開してほしい。今後はウェブなどを活用し、新しい視点を見出すことも必要」とＩＣＴ活用への期待を述べました。

来賓の農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課の大平真紀課長補佐は、今春から行っている牛乳・乳製品の消費推進キャンペーン「プラスワンプロジェクト」の成果に触れ、「消費者から酪農家へのあたたかい共感があるのは、酪農教育ファーム活動が酪農への理解を醸成しているから」と酪農教育ファーム活動への期待を述べました。その後、本題の実践事例発表、続いてワークショップを行いました。

日本酪農教育ファーム研究会 会長
福井 みどり 氏

（一社）中央酪農会議 専務理事
迫田 潔 氏

農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課 課長補佐
大平 真紀 氏

プログラム

13:00	開会
13:10	あいさつ
13:30	実践事例発表 ①帯広市立森の里小学校　教頭　髙橋 淳一 氏 ②筑波大学附属小学校　教諭　由井薗 健 氏
14:30	休憩
14:40	ワークショップ
15:50	まとめ
16:00	閉会

Zoom を利用した実践研究集会の様子

＜実践事例発表①＞

牛（酪農）とのふれあいを通して絆を育む教育実践

報告者
帯広市立森の里小学校
教頭　髙橋 淳一 氏

プロフィール
1974（昭和49）年、北海道帯広市生まれ。帯広市立森の里小学校教頭。同校教務主任を経て、2020（令和2）年より現職。日本酪農教育ファーム研究会会員。

子牛が3泊4日で小学校に滞在

北海道・帯広市立森の里小学校（以下、森の里小）は、牧場から子牛を3泊4日で借り、低学年を中心に全校児童がふれあう「子牛ふれあいファーム」の取り組みを始めて3年になります。教頭の髙橋淳一先生は「牛との絆」「人との絆」「地域との絆」の3つの絆を育むことを狙いとしたこの取り組みの内容と、子どもたちの変化について報告しました。

「子牛ふれあいファーム」の始まりのきっかけは、8年前に髙橋先生が4年生の担任だったころにさかのぼります。牧場体験学習に出かけたリバティヒル広瀬牧場（以下、広瀬牧場）の子どもが同校の卒業生で、牧場側から何らかの交流をしたいという思いを打ち明けられていたのです。その後、教務主任となったことを機に、広瀬牧場と連携した「子牛ふれあいファーム」の実現へと動き出すことになりました。

帯広市では教育施策の中に環境教育や食育の充実、地域総ぐるみの教育活動の充実を掲げています。「これらを実現しつつ、豊かな学びの向上や豊かな心の育成ができる条件がそろった活動は、酪農体験しかないと思いました」と、髙橋先生は振り返ります。

酪農を知らない子に、牛とのふれあいを

農業・酪農がさかんな地域であるにもかかわらず、牛を見たことがない子どもがいたことに驚いたと髙橋先生は言います。家族と一緒に車で移動するときにも、ゲームをしたりして、親子の会話や外の景色を楽しむ機会がないのが理由のひとつではないかと考えた髙橋先生は、学校での意図的な取り組みが必要だと思いました。「子ども同士や家族の間で、牛についての話が生まれ、大人になったときにふるさとを語れる人になってほしい」。そのため、一過性の取り組みではなく、1年生から6年生まで、少しずつステップアップしていけるように計画を立てました。

今回の実践事例発表では、1年生から3年生までの取り組みが報告されました。

1年生は、生活科で子牛の歓迎会とお別れ会、図工で子牛の写生会を行います。子牛に名前を付けることができるのは1年生の特権です。今年は「クーちゃん」と名付け、歌や首飾りのプレゼントもしました。2年生では、生活科で子牛が過ごす小屋に寝藁を敷くなどの世話も行います。トラクターを校庭に運び込み、図工で写生を行うなど、酪農という仕事とのかかわりにも触れました。3年生では、理科や社会科の時間に、広瀬牧場の廣瀬文彦さんから直接話を聞く機会を設けます。子牛の食べ物や体の仕組み、酪農についての話は、子牛を目の前にして聞くことで、実感を伴った学びにつながっていきます。

認証牧場と連携して活動を展開 地域の理解も進む

「子牛ふれあいファーム」の実践にあたっては、コロナ禍以前から、事前の児童への動物アレルギー調査や、体験前後の手洗いとアルコールによる手指消毒を徹底していましたが、今年度は新型コロナウイルス感染防止対策としてさらに、マスクの着用と、密にならないように子牛とふれあう学年を時間で制限するなどの対策を行いました。

子どもたちへの指導用の資料は、廣瀬さんと共同で作成し、禁止事項やその理由を分かりやすく伝える工夫もしています。酪農について詳しくない先生もいる学校とのやりとりは、酪農教育ファームファシリテーターである廣瀬さんの得意とするところです。

森の里小の「子牛ふれあいファーム」は、構想から11年、実施から3年目を迎えました。期間中は、放課後に親子で学校の牛の様子を見に来るなど、農業や酪農、食について子どもが家族と語る場が生まれています。多くの子どもたちが「最初はこわかったけれど、仲良くなったらやさしかった」と、体験を経て子牛に対する愛着を深めていきます。

取り組みを通じて、地域から向けられる学校への関心が高まったことも、成果のひとつです。テレビや新聞を見た地域住民の酪農教育ファーム活動への理解も一層深まりました。髙橋先生が目指す「牛と人と地域をつなぐ絆」が、少しずつ形になっているのです。

今後の課題は、活動の継続とともに、取り組みにあたっての「思い」や「願い」を継承することです。これからも感染症対策を万全にしたうえで活動を続けていく予定です。

報告後、参加者から質問が寄せられました。「酪農体験を教育課程にどのように位置づけたのか」との質問に対して、髙橋先生は、「校内でプロジェクトチームを立ち上げ、継続を前提に、教育課程に位置付けました」とのこと。廣瀬さんからも「続けることが大事」とのアドバイスをもらい、髙橋先生を中心に、全教職員に理解を求めていったことが継続のポイントになりました。

牛やトラクターなどの運搬費用についての質問もありました。3年前のスタート時には、市の補助制度を活用しましたが、今年度は学校の予算から捻出することになりました。教育課程に位置付けられた活動になったことで、学校予算をしっかりと充てることができました。地域の農協や町内会、校内ボランティアの有形無形の協力のおかげで、ここまで「子牛ふれあいファーム」を継続することができたと髙橋先生は言います。

近隣への説明は「子牛が学校にいる間、夜の鳴き声が心配だったので、町内会を通じて学校だよりを配布したり、私から直接、話をするなど理解していただけるように努めました」と、丁寧な対応をしていたことも継続の秘訣です。

子牛を学校で預かるには、さまざまな準備が必要ですが、子どもたちの様子や成長は、その苦労を補って余りあるものがあるでしょう。結びに、髙橋先生は「子牛が学校にいる間、情緒障害を持つ子どもも積極的に参加でき、落ち着いて学校で過ごすことができました。子牛とのふれあいは、コロナ禍の子どもたちの癒しになります。思いや願いを継承し、これからも続けていきたい」と述べました。

「子牛ふれあいファーム」は全学年で実施

- 1年生　ふれあいと牛の写生
- 2年生　ふれあいとトラクター体験
- 3年生　ふれあいと理科・社会
- 4年生　バス学習で酪農体験
- 5年生　酪農関係者による講話
- 6年生　乳製品を活用した調理

「子牛ふれあいファーム」の様子（写真提供：帯広市立森の里小学校）

<実践事例発表②>

小泉牧場物語

報告者
筑波大学附属小学校
教諭　由井薗 健 氏

※「小泉牧場物語」は『感動通信』vol.58（2020年1月発行）にも掲載されています。

プロフィール

1971（昭和46）年、神奈川県生まれ。横浜市立の小学校、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校教諭を経て、現職。日本酪農教育ファーム研究会会員。

地域で唯一の牧場を題材に

続いて、筑波大学附属小学校の由井薗健先生より、3年生の社会科で取り組んだ「酪農」の学びについて実践事例発表が行われました。

小学校では今年度から新学習指導要領が全面実施となりました。今回の改訂で重視されたのは「主体的・対話的で深い学び」です。子どもが周りの人たちと共に考え、新しい発見や豊かな発想を生み出し、見通しを持って粘り強く取り組む力が身に付くような授業が求められています。

由井薗先生の実践はその先駆けともいえるもので、子どもたちが牛とふれあうだけでなく、酪農家と対話を重ね、自分たちでも話し合いながら、共生社会のあり方を考えていったのが特徴です。

舞台は、東京都練馬区にある小泉牧場です。子どもたちは学校のある文京区から5回も牧場を訪問し、酪農体験や牧場主の小泉さんへのインタビューを重ねました。その中である子どもが、小泉さんの一番大変な仕事は「東京23区内で牧場を続けること」ではないかと発言したのをきっかけに、子どもたちの調べ学習は農業と都市の共生という非常に現代的なテーマに迫っていきました。「何が酪農を続ける決め手になったのか」。子どもたちは、時には保護者に相談しながら、それぞれの考えをまとめて持ち寄りました。

発表をする中で、子どもたちは、牧場の歴史や地域とのかかわりを立体的に理解していくようになります。コーヒー豆の搾りかすを牧場内にまく、豆腐店から入手したおからを飼料に加える、牧場の牛乳を使ったアイスクリームを販売する、子どもたちが牛とふれあえるように牧場を開放するなどの取り組みがどのように生まれ、どのような意味を持つのか、広い視野から多角的に問題を追究することができました。学習のまとめは「小泉牧場物語」というオリジナル劇にして学習発表会で上演。保護者や小泉さんを招いての上演会も行うなど、酪農体験を通して学んだことを周囲の人に伝える「表現」にまで高めていきました。

持続可能な社会の担い手育成につながる

実践を通して由井薗先生は、社会課題の解決にむけて「常に問い続ける力」を育むことができたのではないかと言います。「大多数の利益のために少数が犠牲になる、そういう社会の問題は、広く見渡せばいろいろある。社会課題が内包された教材を取り上げ、その問題が起こる条件について、子どもたちの関心を高めていきたい。みんなが幸せになるためにどうすればよいのかを問い続けることこそ、これからの社会を生き抜く子どもたちに育むべき資質・能力だと考えるから」と締めくくりました。

先の見通せない社会を生きていく、これからの子どもの教育は、知識や技術を身に付けるだけでなく、「持続可能な社会を担っていく」心を育てることが大切です。由井薗先生の報告は、酪農教育ファーム活動が「次世代の育成」にもしっかりと結び付いていることを実感させるものでした。

<ワークショップ>

酪農教育ファーム with コロナ

～活動の価値と役割を再確認し、今自分たちに何ができるか考えよう～

実践研究集会の後半は、日本酪農教育ファーム研究会・横山弘美事務局長＝写真（練馬区立大泉南小学校）の進行でワークショップを行いました。全国の酪農家と酪農関係者、教育関係者が距離を超えて顔を合わせ、これからの酪農教育ファーム活動のあり方について活発に意見交換を行いました。

「地域の状況も、職種も違う人たちで交流し合い、現状を知り、コロナ禍でも変わらない酪農教育ファーム活動の価値を再確認し、“活動を止めない”ためにはどうしたらいいか、知恵を出し合いましょう」と横山事務局長が述べたあと、9グループに分かれてグループワークに入りました。

酪農家と酪農関係者、教育関係者を含む4、5人で1つのグループを構成し、進行役を務めた教育関係者が参加者の意見を引き出しながら、コロナ禍における酪農・教育現場の現状や今後、酪農教育ファーム活動でできそうなこと、酪農教育ファーム活動への思いや願いを話し合いました。各グループでテーマに沿った豊かな意見交換をすることができました。

各グループの意見（抜粋）

グループ①

コロナ禍の影響・課題

- 牧場では酪農教育ファーム活動が実践できていない。
- しかし、学校の要望があれば、コロナ対策を徹底して実施する体制はある。

今後、できそうなこと

- 一番いいのは、牧場に行って体験すること。できるなら少人数でやる。
- それが難しいときは、出前授業型。校庭のみ、子牛一頭のみ、スタッフも少人数で。
- 後日、その子牛を貸し出した酪農家の可能な範囲で、リモートを活用した施設見学やインタビューを行う。牛の出産や、牛が役目を終え牧場を去る時の様子もタイムリーに提供いただき、酪農家の思いも語ってもらえたら。

思いや願い

- 牛にふれ、牛のさだめや役割、いのちを実感する体験は、行うことが前提。そこから子どもたちの疑問や好奇心を引き出したい。さまざまな工夫をすることで、アフターコロナに、これまで不十分だった「学び続ける」「かかわりをもちつづける」という活動が実現できるのではないか。

（進行：國分重隆氏・東京都教職員研修センター）

グループ②

コロナ禍の影響・課題

- 関係者の連携と消費者からの応援により、酪農家は生乳を1滴も無駄にせずにすんだ。酪農教育ファーム活動はできていない。
- 学校ではオンライン学習がスタート。
- 新型コロナウイルスに感染する不安で外に出られない。大人の不安が、子どもの不安定にもつながっている。

今後、できそうなこと

- 牧場からの「オンライン中継」。リアルタイムでの質問ができ、地域による比較も可能になる。全国各地の学校と牧場等のつながりが無限に広がり、全国各地で共有できる。

思いや願い

- オンラインを活用することで、「つながりが無限に広がり」、「全国各地で共有できる」ようになるのでは。

（進行：野上泰宏氏・帯広市立帯広第五中学校）

グループ③

コロナ禍の影響・課題

- 「本物」に直接ふれあう体験ができなくなった。

今後、できそうなこと

- 少人数での活動に特化した酪農体験のカリキュラムをつくりたい。人数が少ないほうが学びは深まる。

思いや願い

- コロナ禍により、食料自給率の問題が社会で意識されやすくなった。それを切り口に一般の人の酪農への理解が進むとよい。
- 正しい知識と正しい対応を通して、地域の酪農への理解を促したい。

（進行：青柳友作氏・板橋区立三園小学校）

グループ④

コロナ禍の影響・課題

- 関東地方は感染者が多い。イベントができていない。９月から徐々に再開。どうしたら酪農教育ファーム活動ができるか模索中。
- 学校ではコロナ対策予算がつき、ICT 活用の推進や、GIGA スクール構想の前倒し、タブレット PC の配付、新しいかたちでの学校行事の対応等に追われた。

今後、できそうなこと

- オンラインで牧場から中継し、テレビ番組のようにレポートをする。
- 酪農体験を行うのなら、疑似体験にするとか、近隣小学校からの短時間の体験に絞り、少人数、マスク着用等の新型コロナウイルス感染防止対策を徹底する。

思いや願い

- こんな時だからこそ、ホームページや SNS を通じた発信や、繰り返しの交流など、固く考えず気楽に行うのがよいのでは。

（進行：亀山桂子氏・おおさわ学園三鷹市立羽沢小学校）

グループ⑤

コロナ禍の影響・課題

- うちの学校では、学校再開とともに牧場訪問を再開した。密を避けるため、1クラスを２つに分けて行った。
- これまで行っていた出前授業が全てストップ。
- ステイホームの影響もあってか、一般の人の興味が牛乳や食べ物に向くようになったと感じている。

今後、できそうなこと

- 先生方と連携し、機器や Wi-Fi 環境を整えながら、オンラインで酪農家の出前授業ができないか取り組み中。
- 教師間で酪農についての理解を深める機会をつくる。

思いや願い

- 中高生ならオンライン授業でも集中できるが、小学生の場合は実際の体験が大切だと思う。
- 酪農教育ファーム活動には、子どもだけでなく教師をも変える力がある。牛乳や酪農の価値、その背景を教師にも伝えたい。

（進行：角井深雪氏・岩国市立玖珂小学校）

グループ⑥

コロナ禍の影響・課題

- コロナ禍により、学校では遠隔授業が普通のこととして行えるようになった。
- コロナ禍以前からのことだが、酪農教育ファーム活動が広まらないこと、継続的な取り組みとならず１回限りの訪問で終わってしまうことは課題。学校、酪農家がお互いの興味を引き出す必要がある。

今後、できそうなこと

- 実際に牧場を訪問できなくても、リモートでの継続的な訪問が可能となる。
- 牧場を訪問した際、出産間近の乳牛から子牛の心音を聞き、後日、出産時の様子を動画で学校に配信する。子牛の成長から出荷までを配信で追うことで、継続的な学びにつなげることができるのでは。

思いや願い

- オンラインも取り入れた活動を SNS 等で発信することで、保護者や教育関係者にも興味を持ってもらえるのではないか。

（進行：小林信一氏・
静岡県立農林環境専門職大学短期大学部）

グループ⑦

コロナ禍の影響・課題

- コロナ禍とは関わりないが、近隣にあっても、牧場の存在が知られていないこと、さらに、教育現場では酪農教育ファーム活動はほとんど浸透していないことは大きな課題。

今後、できそうなこと

- 牛乳がどのように生産されるのかを知らせていくことが大事。
- 単発の体験学習も大切だが、特定の子どもたちによる継続した体験活動ができるとよい。

思いや願い

- 牧場で体験を終えた子どもたちの態度の変化や、考えの変化などが見られたときにやりがいを感じる。酪農業が人の食や、牛のいのちに深く関わっていることを伝えていきたい。
- 酪農教育ファーム活動を行う酪農家は本業に加えてリスクを伴う酪農体験を行い、学校へアプローチをかけてくれている。これはすごくありがたいこと。もっと広げる努力をしていきたい。

（進行：林眞平氏・鹿児島市立玉江小学校）

グループ⑧

コロナ禍の影響・課題

- 酪農家の中でも、体験活動がストップしているところもあれば、これまでと同じように体験活動ができているところもある。
- 酪農教育ファーム地域推進委員会は、集まっての会議が開催できず、活動ができていない。

今後、できそうなこと

- YouTube による酪農教育ファーム活動の配信。酪農家が「子牛が産まれました！」などのコメント入りの短い動画を配信するのもよいのでは。

思いや願い

- 動けない今だから、酪農家の語り部による教材づくりを進めたい。しかし集まれないというジレンマがある。

（進行：尾場瀬優一氏・南九州市立宮脇小学校）

グループ⑨

コロナ禍の影響・課題

- 高校の農業科でも、オンライン授業が始まった。３カ月間の休校中、動物の管理はすべて職員が行った。
- 体験牧場では団体予約がキャンセルになり、収入減となってしまった。

今後、できそうなこと

- 牧場のオンラインツアーを企画。事前に牛乳などを学校に送っておき、リモートで牧場を紹介。搾乳シーンなどを見せる。
- 実際に体験するなら少人数で。少人数の子どもを対象とした１日牧場体験は好評で、今年も実施。

思いや願い

- オンラインも活用しながら、みんなが幸せになるようなことをしていくのが大事！

（進行：木村砂織氏・東京シューレ葛飾中学校）

まとめ

コロナ禍の影響・課題

●酪農教育ファーム活動が実践できていない牧場や学校がほとんど。
●しかし、中には、新型コロナウイルス感染防止対策に工夫を凝らし、学校再開とともに活動を再開した地域・牧場もある。衛生対策で以前から実施していた体験前後の手洗い･消毒に加え、マスクの着用、短時間、少人数に限定するなど、工夫しながら活動を行っている。

今後、できそうなこと

●オンラインや SNS を活用した活動の展開との意見が多数。直接体験は叶わなくとも、継続的な訪問（学び）が可能になるのではないか。具体的には子牛の成長を学ぶ動画の配信など。
●一方では、出前授業のあと、オンラインでの牧場の施設見学や酪農家へのインタビューを実施し、学びを深めるという今までの活動を昇華した意見も出た。

思いや願い

●酪農教育ファーム活動は牛にふれ、いのちを実感する「直接体験」を行うことが大前提ではあるが、そこに至るまでのきっかけづくりや、繰り返しの学びも重要である。
●そのためには、教材をつくって学校に届けたり、オンラインを活用して気軽に酪農家と子どもたちとがつながるなどの工夫が必要。
●酪農家としては、どんなかたちであれ子どもたちと関わっていきたい、教育関係者としては酪農家とつながり酪農教育ファーム活動を実践したいという意見が多数を占めた。

学校行事が減っている今こそ、体験の価値を子どもたちに

～実践研究集会に参加した酪農家　の方々にお話を伺いました～

キリカエ　ヨシミツ
切替 宣充 氏

プロフィール　♪切替牧場 株式会社♪

千葉県袖ケ浦市で、経産牛 35 頭、育成牛 30 頭を飼養。妻と子供 5 人、両親、姉の 10 人家族。“Well-being Milk Farm” をコーポレートメッセージとし、“MILK の恵みで人・牛・地域社会・環境を健やかに、豊かに” を理念に掲げ、酪農の価値・可能性の最大化のために奮闘中。

タジマ　カズエ
田嶋 和恵 氏

プロフィール　♪田嶋牧場♪

福井県あわら市で経産牛 55 頭、育成牛 25 頭（うち 20 頭は預託）を飼養。牧場主は和恵氏の夫の敏氏（サシ）。和恵氏は、牧場全体の目配りをし、また経営しているソフトクリーム屋の補助や酪農教育ファーム活動の PR および学校との調整を行う。

〈実践事例①〉子どもたちの純粋な反応で、酪農の価値に改めて気付く

今、酪農教育ファーム活動に関わる人たちが集まり意見交換できなくなっている状況の中、オンラインでの開催は意義深いと思いました。実践発表の内容も素晴らしく、画面越しでも支障はありませんでした。

新型コロナウイルスの感染が拡大して以降、私の牧場では、まず家族が外部との接触を極力避けるようにし、取引先とも主に電話でやりとりするようになりました。毎日仕事のある酪農家が万一感染したら、経営にも打撃があるだろうと、営業の方もかなり気を遣ってくれました。

感染防止に必要な対策がわかってきて、学校が再開し始めた6月ごろから生活のペースが徐々に戻ってきたように思います。

生乳は生き物である乳牛から毎日搾られ、急に増やしたり、減らしたりすることができません。コロナ禍で生乳の需要が激減しましたが、指定生乳生産者団体や乳業メーカーのご尽力、何より消費者の応援で、生乳廃棄もなく乗り切ることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

出前授業は学校・酪農家の双方にメリット

千葉県では、学校に牛を連れて行き、子どもたちに牛とふれあいながら酪農のことを学んでもらう「わくわくモーモースクール」を、今年も実施しており、私も協力しています。10月に訪問した成田市立平成小学校は、全校生徒ではなく、4年生だけを対象とした「ミニモーモースクール」となりました。搾乳体験、子牛とのふれあい、酪農と食育のお話を中心とした構成は、通常の「わくわくモーモースクール」と同じです。酪農と食育の話では、学校給食で飲む牛乳のことだけに引き寄せて説明するのではなく、どの献立も生きていた動物や植物の「いのちをいただいている」という点を大事にしています。それは私たち生産者の想いとして伝える価値があることだと思います。また、牛のえさを扱う人、病気を防ぐ薬を扱う人、牛乳を運ぶ人など、多くの人が関わって牛乳ができるのだと伝えています。

今年は感染予防のため、酪農家はマスクやフェイスシールド、手袋を着けて実施しました。コロナ禍前からもともと、感染症対策のため、体験前後には手洗いとアルコールによる手指消毒を徹底してきましたから、その点は学校側から安心してもらえたようです。

感染リスクを完全にゼロにするなら、体験活動をしないことになりますが、私は体験活動を通して子どもたちが得られる経験と感動にこそ大きな意義があると思います。感染防止策を万全にして最善の注意を払いつつ、子どもたちに学びの場を提供することが重要です。出前授業は、感染リスクの低減と、学校・酪農家双方の負担が軽くなるというメリットがあり、学校行事が少なくなる中、先生方にも喜んでもらっています。

酪農教育ファーム活動は、酪農家が対外的な交流を持ち、自分たちの仕事を多くの人に伝える良い機会です。子どもたちが牛にふれたときの純粋な反応に出会うと、酪農の価値に改めて気付くことができます。子どもたちが牛乳を飲んでくれていることで、さらに牛を大切にする気持ちが高まり、生産者としての責任もいっそう強く感じています。

「わくわくモーモースクール」について

（千葉県酪農農業協同組合連合会　石野久子氏）

千葉県では毎年8校を対象に「わくわくモーモースクール」を実施しています。例年2月中旬～4月中旬にかけて、千葉県教育委員会を経由して、各市町村教育委員会を通じて募集します。今年はコロナ禍ではありましたが、規定数を超える多数の応募がありました。1校が辞退になったものの、多くの行事が中止となる中で出前授業のかたちであれば問題ない、反対にありがたいと言われました。学校とは、日程調整から学校の規模を確認するための事前訪問など、打ち合わせは欠かせません。一方で、本県の酪農教育ファーム認証牧場とも日程調整をし、毎回切替氏にはご協力をいただいています。

〈実践事例②〉体験に来た人たちが喜んでくれる、それがあるから続けられる

筑波大学附属小学校の取り組みは、牧場と学校とがしっかり打ち合わせをしているのはもちろんのこと、先生の思いを牧場体験に盛り込めているところが素晴らしいと思いました。

田嶋牧場では、多い時で月に2・3回、酪農体験の受け入れを行っています。保育園・幼稚園、小学校低学年が多く、小学校高学年以上は多くありません。

何度も繰り返し参加される学校は少なく、先生に「初めての経験なので、話の内容は牧場にお任せします」と言われるケースもあります。そこでこれまでは、私が酪農家として伝えたいことを中心に話すようにしていました。しかし、一方で、それが果たして子どもが知りたかったことなのだろうか、関心があることなのだろうかと、何かもやっとしたものも抱えていました。

筑波大学附属小学校の子どもたちを受け入れた小泉牧場さんの姿勢を知り、体験の目的やねらい、学校として期待すること、酪農家にどんな話をしてもらいたいかなど、コミュニケーションを取ることが大切なのだとわかりました。

コロナ禍で県内の高校生を受け入れ

今年度は、コロナ禍の影響で体験の受け入れが激減しました。唯一、実施したのは、10月の県内の高校生の受け入れです。福井県の高校の中には、遠足の目的地を生徒たちで決める学校があり、ある高校の1クラスが、インターネットなどで情報を得て、田嶋牧場でのえさやり体験を選んでくれました。

事前の打ち合わせは、通常は先生に牧場まで来ていただき、内容の計画とともに危険箇所のチェックなどを行います。しかし、今回の学校は牧場から遠かったので、なかなか日程調整ができず、何度も電話で打ち合わせをしました。

当日は、乳牛や酪農についてまとめたタペストリー（中央酪農会議作成）を活用した話や、牛へのえさやり体験などを実施しました。生徒の検温、体調チェックは、学校でも普段から実施しているということで万全でした。それに加え、大型バス2台に分乗して密にならないようにするなど、感染リスク軽減策もとってくれました。

牧場側としては、生徒が密にならないよう間隔を空ける、体験はグループに分かれて行うなどの配慮をしました。手洗いや消毒は、普段の体験でもお願いしていることですし、コロナ禍だから特別に負担が大きかったとは思いません。何より、高校生の「もっと知りたい」という意欲に、久しぶりに受け入れをした私も充実した時間を過ごすことができました。

その日に観察した牛が、高校生の体験の数時間後に出産をしました。こうした様子をすぐに伝えるためにも、今後はＺｏｏｍなどのオンラインツールの活用にも挑戦していきたいです。

感動した子どもが将来、酪農に携わってくれたら

今年度は、地域の〝農業女子〟と〝企業女子〟とがコラボした酪農体験会などを計画しているのですが、実現できるかどうか、現状では見通しが立っていません。酪農教育ファーム活動も同じです。状況が落ち着いたら、また少しずつ、みんなでがんばっていこうという気持ちでいます。

酪農教育ファーム活動のやりがいは、来てくれた人たちが喜んでくれることです。最初は「こわい」「くさい」と言っていた人たちが、体験後「帰りたくない」と言ってくれる、その喜びがあるから続けることができます。

他県に比べて酪農家の少ない福井県ですが、多くの人に牛にふれあってもらい、生産現場から食卓までの見えない部分を伝えていきたいです。そして、感動してくれた子どもの中から、将来、酪農に携わってくれる人が出てきたらうれしいですね。